

# 社会的盲点の可視化はいかにして可能か

東京女子大学 赤堀三郎

## 1 目的

本報告は、ニクラス・ルーマンの社会学理論の再解釈により、「いかにして新たなる経験を先取りする理論を構築できるか」という、本テーマセッションが提起する問いに答えることを目的とする。

## 2 方法

本テーマセッションの議論の中心である「新しい社会的経験」を、本報告では、社会（という観察者＝システム）が認識できなかったことを認識できるようになること、すなわち「社会的盲点の可視化」として解釈する。その上で、本報告では「社会的盲点の可視化はいかにして可能か」という問いを立てる。

この問いに答えるために、本報告では、ルーマンの言う「セカンド・オーダーの観察」および「理念の進化」という考え方に着目する。

## 3 結果

セカンド・オーダーの観察者は、ファースト・オーダーの観察者を観察する者であり、ファースト・オーダーの観察者にとっての盲点（観察できないこと）を観察できる。この定義を額面通り社会というシステム（＝観察者）に当てはめて考えれば、社会にとって盲点となっていることを社会学（というセカンド・オーダーの観察者）は観察でき、それが社会の中での社会学の存在意義だということになる。

だがこのセカンド・オーダーの観察者は、ルーマンの文献にあたると、あるときは近代社会というシステムそのものとされており、またあるときは社会学（という観察者）とされている。盲点の可視化を実現するのはいったい、社会（というシステム）そのものなのか、それとも社会学なのか。本報告では、このような記述の揺れは理論上の欠陥であり、改良が必要であると考えられる。

次にルーマンの「理念の進化」という考え方を瞥見すると、そこから、社会の中に「それまで捉え得なかった新奇な何か」を捉えうる枠組が生じ、選択を経て、安定化するというプロセスを見出すことができる。ここにおいて（すなわちルーマンが言う「理念の進化」という枠組をヒントに）、「新しい社会的経験」の生じる条件やメカニズム、つまり、社会（という観察者）が、どのようにして何か新しいものを認識できるようになるのかを問うための理論の獲得が期待できる。

以上から、従来の錯綜した議論を次のように整理することができる：

- ・ 社会（という観察者）は、進化のメカニズムによって、自ら（社会）にとっての盲点を可視化する。
- ・ 他方、社会学（という観察者）は、セカンド・オーダーの観察というテクニックによって、社会にとっての盲点を可視化する。

## 4 結論

社会学理論というセカンド・オーダーの観察者は、社会というシステム（＝ファースト・オーダーの観察者）における進化のプロセスを観察・記述することによって、社会が新たな認識枠組を得る（認知され難かったものが広く認知されるようになる）条件やメカニズムを明らかにすることができる。

## 文献

- , 1997, *Die Gesellschaft der Gesellschaft*, Frankfurt am Main: Suhrkamp. (=2009, 馬場靖雄・赤堀三郎・菅原謙・高橋徹訳『社会の社会』法政大学出版局.)
- , 2008, *Ideenevolution: Beiträge zur Wissenssoziologie*, Frankfurt am Main: Suhrkamp. (=2017, 土方透監訳『理念の進化』新泉社.)